

---

---

機関番号：24505

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520235

研究課題名(和文) ビッグ・ハウス文学におけるモダニティの実証的研究、及び新批評の構築

研究課題名(英文) A Study to Reveal Modernity in Anglo-Irish Big House Literature and Establish a New Paradigm for Its Criticism

研究代表者

山根木 加名子 (YAMANAKI KANAKO)

神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：30132492

---

---

研究成果の概要(和文)：

本研究の目的は、アイルランド文学の主要な伝統をなすものの旧弊だとみなされてきたビッグ・ハウス文学を見直して、正当な評価と文学的地位を与えることである。そこで現代作家エリザベス・ボウエン、モリー・キーン、ウィリアム・トレヴァー、ジョン・バンヴィルの作品をフェミニズム、表象、精神分析、物語論、ポストモダニズム等の現代批評で分析し、個々の革新性を実証した。また、ボウエンやキーン、トレヴァーが19世以来の伝統を継承しつつモダニティを加えていくのに対し、バンヴィルはこの伝統に挑み、慣習を打破することによって再生をはかろうとすることが判明した。

研究成果の概要(英文)：

This study examines the Big House novels, the mainstream of the Anglo-Irish literature, written by Elizabeth Bowen and her contemporary successors, Molly Keane, William Trevor, and John Banville. The literary tradition of Big House novels has been regarded as conventional, hidebound, conservative, and old-fashioned. My research demonstrates modern elements in these writers' works that set them apart from the traditional Big House novels. It re-evaluates the Big House literature from this new perspective and offers a new critical paradigm for examining this tradition. To accomplish my purpose, I analyze Bowen and her successors' works through various approaches of contemporary literary theory, including feminist criticism, the narrative approach, psychoanalytic theory, and postmodernism.

I argue that Bowen, Keane, and Trevor are modern writers who try to maintain the literary tradition that begins with Maria Edgeworth's *Castle Rackrent* (1800) by adding modernist elements to the tradition. In doing so, they contrast with Banville, who as a postmodernist attempts to create postmodern, international literature by subverting this tradition's stale conventions and reinventing a new form.

Thus, my study contributes to a re-evaluation of Anglo-Irish Big House literature and presents a justifiably higher evaluation of this genre.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アングロ・アイリッシュ文学、ビッグ・ハウス文学、エリザベス・ボウエン、ウィリアム・トレヴァー、ジョン・バンヴィル

1. 研究開始当初の背景

(1) アイルランドでは1970年から1980年代にかけて、アングロ・アイリッシュ文学を再発見しようとする「アングロ・アイリッシュ文芸復興」が起こった。その中心となったのはビッグ・ハウス文学である。「ビッグ・ハウス」は、アイルランドにおけるイギリス人植民者とその子孫であるプロテスタント支配階級の館の総称であり、彼らを担い手とするのがビッグ・ハウス文学、及びビッグ・ハウス文化である。

ビッグ・ハウス文学は、アイルランド文学の主要な伝統を形成してきたが、1920年代以降、ビッグ・ハウスの没落と共に衰退しつつあった。ところが、20世紀後半から再評価の気運が高まってきた。この伝統の主要メンバーとなるのがエリザベス・ボウエンである。ボウエンについては、生誕100周年である1999年頃を契機に、全集の再版や研究書の出版が行われた。また、彼女に続く諸作家のビッグ・ハウス小説の出版も相次いだ。しかも、こうした作品は、19世紀、マライア・エッジワースに始まる伝統的ビッグ・ハウス文学とは異なる革新性を持っている。

(2) ビッグ・ハウス文学は、アイルランド文学史上、重要なだけでなく、英文学研究においてもきわめて重要である。なぜならそれは、英国のカントリー・ハウス文学と相互に多大な関係性を有するからである。事実、ボウエン自身、ヴァージニア・ウルフ、E.M.フォースター、ヘンリー・ジェイムズなどの主要な英国作家たちと、文学、及び私生活の両面において、相互に深い影響を及ぼしあっている。

(3) こうした重要性にもかかわらず、国外・国内においてビッグ・ハウス文学に関する研究は盛んとは言えない。とりわけ我が国では、1991年に拙著『エリザベス・ボウエン研究』が刊行されて以来、単行本としてのボウエン研究書は出版されていないもようである。また、ボウエン以降のビッグ・ハウス小説家についての研究もきわめて少ないと思われる。

そこで本研究を計画した。

## 2. 研究の目的

研究の目的は、20世紀ビッグ・ハウス文学の中心となるエリザベス・ボウエンとその後に続くモリー・キーン、ウィリアム・トレヴァー、ジョン・バンヴィルの主要作品を現代批評理論で分析し、これらが19世紀マライア・エッジワースを始祖とする伝統的ビッグ・ハウス小説とは異なるモダニティ・革新性を特徴とする事実を実証することである。さらに、それによって新たな批評を構築し、これまで過小評価されがちであったビッグ・ハウス文学を見直して、正当な評価と文学的地位を与えることである。

## 3. 研究の方法

(1) アイルランド・イギリス・米国・日本国内において、研究上必要となる資料・文献の調査研究と資料の収集を行った。

収集した資料は以下のようなものである。ボウエン、キーン、ジョンストン、トレヴァーに関する第1次資料（作品、手稿、エッセイ、ノンフィクション、日記、創作ノート、伝記的資料、書簡、インタビューなど）、及び、批評に関する文献などの第2次資料である。また、20世紀後半のビッグ・ハウス文学やビッグ・ハウス文化の再発見に関連する歴史的、文化的資料・文献（書籍、論文、新聞記事、パンフレット等）の調査研究と収集も行った。

以上の資料・文献の中には、未公開資料や手稿、インタビュー録など、日本国内で入手できないものも多く、閲覧して文献複写サービスやマイクロフィルムによって収集するためには、現地に出向かなければならなかった。そこで、こうした調査研究と収集は、主にダブリンのトリニティ・カレッジ・ダブリン図書館、ロンドンの大英図書館、米国・オースチンのテキサス大学内ハリー・ランサ

ム・センター、及び、日本国内の国立国会図書館等において行った。

(2) これらの資料をもとに、ボウエンの後期作品をフェミニズム批評や表象批評で分析し、モダニティ・革新性を明らかにした。次いで、キーン、トレヴァー、バンヴィルの主要作品を、精神分析批評、ナラトロジー（物語論）、ポストモダニズム批評で考察し、これらが19世紀エッジワースを始祖とする伝統的ビッグ・ハウス小説とは異なる現代性をもつことを実証した。

(3) さらに、ボウエン、トレヴァーらのモダニスト作家とバンヴィルらポストモダニストとを比較考察し、両グループの作品に見られるモダニティ・革新性、及び、ビッグ・ハウス文学再生に対する態度の違いを明らかにした。

## 4. 研究成果

(1) ボウエン、キーン、トレヴァー、バンヴィルの作品を現代批評理論で分析することにより、以下の成果を得た。まず、ボウエンの『イヴァ・トラウト』(Eva Trout, 1969)に関する2本の論文では、①エクリチュール・フェミニンを含むフェミニズム理論を用いてこの作品がフェミニズム的意欲作であることを論証したり、あるいは、②作品中の「場」の持つ表象性に注目して考察した。次いで、トレヴァーの『運命の愚者』(Fools of Fortune, 1983)に関する論文では、ナラトロジー（物語論）的アプローチにより、作品が卓越した物語言説の手法を持つことを実証した。また、キーンの『立派な行い』(Good Behaviour, 1981)に関する論文では、ジュリア・クリステヴァのアブジェクション理論を援用して分析し、「主体の脱中心化」「意味の

決定不能性」というポストモダニズム的傾向が見られることを示した。さらに、バンヴィルの『バーチウッド』(Birchwood, 1973)に関する論文では、「決定不能性」「(伝記からロマンスまで) 様々な表現媒体の融合」「ビッグ・ハウス小説など伝統的文学様式の諷刺」といったポストモダニズムの特徴が見られることを論証した。

(2) このように、モダニストのボウエンやトレヴァーは、19世紀エッジワースに始まるビッグ・ハウス文学の伝統を継承しつつ、新たにモダニティを加えていこうとするのに対し、バンヴィルは、ビッグ・ハウス文学の伝統に挑戦し、その慣習を打破して、より刺激的なポストモダニズム的文学を創造しようとする。キーンはモダニストであるがポストモダニズム的傾向も持つことが判明した。

(3) 現代ビッグ・ハウス文学に見られるモダニティ・革新性の実証は、国内外において未開拓分野であり、本研究で得られた成果は国内はもちろん、海外においてもこれまで論じられていないものである。そこで、現在、英語論文化の作業を進めており、国外にも発信していきたい。

(4) また、この成果は、ボウエン研究、及び、アングロ・アイリッシュ文学研究にも多大な貢献をすると信じる。

① ボウエン研究への貢献：ボウエンは20世紀を代表する英国女性作家の一人とみなされつつも、その研究は盛んとは言えなかったが、生誕100周年以来、再評価の気運が高まってきた。本研究の成果は、こうしたボウエン研究に新たな視座を与えるとともに、研究を活性化させるのに役立つと思う。

② アングロ・アイリッシュ・ビッグ・ハウス文学研究への貢献：アイルランド文学の主要な伝統であるにもかかわらず、W. B. イェイツ以降のアングロ・アイリッシュ・ビッグ・ハウス文学に関する研究は希少である。国内での先行研究はあまり見られず、国外でも Vera Kreilkamp 著、The Anglo-Irish Novel and the Big House (New York: Syracuse UP, 1998)のような単行本の1章か、短い論文資料が少数見られる程度である。したがって、本研究の成果はこの分野でも貢献できると考える。

(5) なお、今回研究対象とした作家の諸作品に見られたモダニティ・革新性をさらに体系化して総体的な新批評にまとめ上げるところまでは時間的制約のためできなかったが、これについては次の研究につなげていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

① 山根木加名子、旅の文学として読む『バーチウッド』——ポストモダニズムの研究、PERSICA、査読有、38巻、2011、41-53

② 山根木加名子、W. トレヴァーの『運命の愚者』——ナラトロジー的アプローチ、PERSICA、査読有、37巻、2010、1-12

③ 山根木加名子、〈場〉と〈移動〉の表象——『イヴァ・トラウト』再考、PERSICA、査読有、36巻、2009、15-25

〔図書〕(計1件)

① 山根木加名子、他、大阪教育図書、英語・英米文学のフォームとエッセンス、2009、453-461

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

山根木 加名子 (YAMANEKI KANAKO)

神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：30132492

(2)研究分担者  
なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
なし ( )

研究者番号：